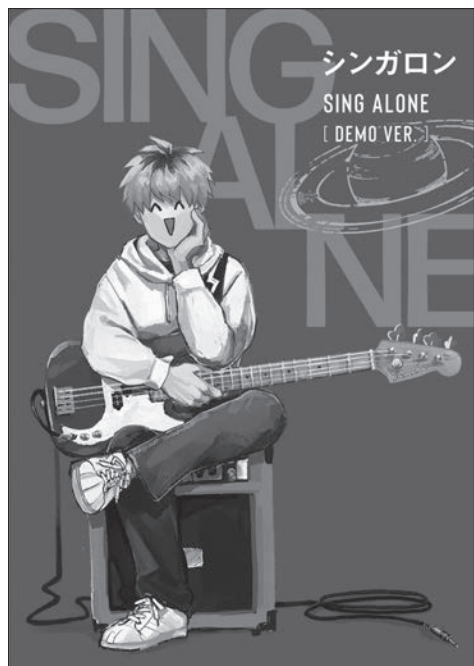


『シンガロン』続き掲載



◀ 『シンガロン [DEMO ver.]』・作 山川夜高
2025年3月23日発行・A5判54ページ

新作小説『シンガロン』の続編の制作が遅れている。3月23日に「デモ版」として冒頭3話を発表したが、正式版リリースの見込みが立たず、いつまでも新刊を出せないでいた。特例として本紙で「デモ版」の続きにあたる原稿(約6000字)を掲載する。掲載原稿は制作中の文章であり、正式版では内容が変更される可能性が高い。作者の山川夜高は「デモ版がすでに『チラ見せ』なのに追加の『チラ見せ』をしなくなかったが、本当に各所に掲載する内容が無いため止むを得なかった」と陳謝した。

「進捗だめです」 作者陳謝・原稿チラ見せ

海辺新聞

2025年9月21日
日曜日

シーサイドブックス
SeasideBooks
制作・山川夜高

Website
libsy.net



Online Store
「架空ストア」
で委託販売中



「お詫び小説」掲載

次ページから・約6000字

『シンガロン』はウェブサイトで連載している架空のロックバンドの小説シリーズ『Drive to Pluto』(https://libsy.net/dtp)の作品。西暦2000年前後の東京・八王子市や中央線沿線地域を舞台に、新人ベーシスト・カシマ(嘉嶋元気)が大学のサークルの肝試しで「呪われた」事件をきっかけに僧職のギタリスト・土家と出会い、ロックバンド「環」[Mach]を結成するというストーリーだ。デモ版ではバンドメンバーの出会いから初ライブまでを描いたが、正式版では環「Mach」のバンドメンバーであるギタリスト・弟子丸とドラマー・和田のサブエピソードや、カシマが出会った同世代のバンド「This Earth Is Destroyed」や先輩バンドとの交流を描きながら、広げた大風呂敷をなんかつまひこまこめる方針だ。

サイト改装も大幅に遅延

作者の山川夜高は、シーサイドブックスのウェブサイト(https://libsy.net)の改装も予定していたが、こちらもリリースの目処が立っていない。山川は「全体的に課題は山積みだが、自分は一人しかいないため人手が足りない。それに、もし自分が分裂したとしてもPCは一台しかない」と語った。

海辺新聞は

新作情報 近況報告

与太話(セルフパロディ)

をお届けする
フリーペーパー



つまるところ
フィクションです

表紙元ネタ・徳川家康の「例の絵」か

『シンガロン [DEMO ver.]』の表紙について、タマ美術大学の綿貫樂雲名誉教授は「徳川家康三方ヶ原戦役画像」II 徳川美術館所蔵IIが元ネタであり、作中のカシマの「やっちゃった感」を重ねている。しかし「三方ヶ原戦役画像」は神格化された家康を描いた後世による想像図であり、家康の姿勢は仏教の座法のひとつである半跏趺坐を描いているとされる。よって表紙のカシマもまた仏性を示している」とWikipediaの記述を「きざし」と与太話を披露した。



次のページから『シンガロン [DEMO ver.]』の読者向けに、『シンガロン』本編の制作中の抜粋を掲載します。内容はデモ版の物語終了直後の出来事を描いています。紙面の都合で詳細なあらすじを掲載できないため、『シンガロン [DEMO ver.]』未読の方には説明不足の内容&ネタバレになることをご容赦ください。作中には同世界観によるロックバンドを題材にした小説「フアング」の内容の言及を含みます。

ねずみちゃん
LINEスタンプ



「ぼくたち」は波形のまにまに、
あなたがさんかくの
ボタンを押すまで
待っている。



あるロックバンドの「逸話」
Drive to Pluto

表紙も本文もつくれる!

文芸デザイン 有償依頼制作
同人誌向け 特殊装丁や印刷所の相談も◎

できること・制作事例など ▶ libsy.net/order

装丁部 by SeasideBooks

『シンガロン』制作中本編抜粋



2000年1月

呼び出しがかかったのは、初陣後の打ち上げ会の酒の席の発言を皆が覚えていられるほどのこと、まだ去年のうちの出来事だった。

ライブハウス〈吉祥寺SHADE〉の店長・在原は終演後、SHADEの近所の焼鳥屋に環・Tamaの一同を連れて行って飲み食いさせた。「こゝ、炊き込みご飯がおいしいんだよね」と店長が言ったのを覚えている。皆がビールの2杯目を注文し、カシマはジョッキに入ったシンジャーエールを飲んだ。注文はあらかじめ机の上に届いたか皆の胃袋のなかに収まり、おのおの煙草に火を灯したタイミングで、在原は「これはみんなに言ってるんだけどね」と前置きしてこんなことを話しはじめた。

俺のふるい友達がインディーズの音楽レーベルをやってるんだ。うん、ロックの。で、今はとにかく若手の新しい音楽を探してるんだって。

だからうちで演ってくれたバンドは一応全部でいつに教えることにしてるんだけど……

「ボク……録音、ないですよ。」とカシマ。「こいつが入る前は、2曲入りぐらいのEPは作ったんですけどねえ」と土家がスキンヘッドの頭を掻く。

「アレンジもボーカルも変わったけど、そういうやあ録ってなかったよな」と和田。「音源作んの？」と弟子丸が人差し指と中指に煙草をはさんで吐息する。

「あ、いいいよいよ、急がなくて。いまはメンバーチェンジしてボーカルがふたりになったって話も伝えとく。それで、どうかな？ 伝えともいいい？」

という在原からの問いは誰も本気にしてなかった。SHADEのイベントに出演する際、スリーピースの環のサンプル音源は和田経由で在原の手に渡っていた。だからそのまま二つ返事で了承したのをまだ皆が覚えていた。在原から進展を聞かされたのはそれからほんの数日後、まだ2000年12月中の出来事だった。在原から和田に電話がかかって、取り次いだ。

「とりあえず会いたいから来てくれたって。できれば全員」と和田から。

「忙しいんだがなあ」電話を取った土家が答える。年末年始の寺院は書き入れ時だ。

「向こうもそうみたい。年末年始はホテルカリフォルニアで21世紀スキッドマンがニューイヤーズパーティー？ でアメリカに飛んでるから連絡は年明けにくれ、だって」と在原からの伝言を一言一句伝える和田。「成人式後でもいいかなあ？」

「もしかして変な人？」ここの流れを聞いた弟子丸からのコメント。

「ギョーカイシンってそういうところあるのかな？」カシマの素朴な感想。カシマの出身地の成人式は夏に行われるので、この年末年始は帰省せず過ごした。

お寺と花屋は毎年いそがしく迎える新年と成人式を終えて、これからバレンタインデーや卒業・入学シーズンの花屋の繁忙期に向かう前の小休止の1月中旬に、土家・弟子丸・和田・カシマは指定された渋谷の

事務所に赴いた。汚穢なる大都会渋谷の喧騒と喧騒の間にせせこましく建っている、用事がなければ絶対に入ろうとは思わないような雑居ビル〈星野第三ビルディング〉に今まさに用事があって面構えを見上げる4人。入居しているテナントはベルシャ絨毯屋、美容室2軒、税理士事務所、占いの館、マッサージュ店、エトセトラ、そして得体的のしれない音楽出版社。

「ほんとに入んのお？」と土家は眉をひそめる。さっきスクランブル交差点を通ったときにも「うわあ、コギャルだあ」と口走っていた。ギャルは吉祥寺にも八王子にもいたのだが。

指定の7階の扉にはスク립ト体で〈Pinige Records〉と名前が掲げられている。Fの字はフエンダー風の逆向きの意匠だ。擦りガラスの扉にはロックバンドの名前を描いたステッカーが節操なく貼られていた。

呼び出しベルを鳴らして「ごめんください、社長さんとお約束のある環ですが」と土家が言いかけている間に扉が大きく開いた。

「やあ！ 遠路はるばるどうも」と迎え入れたのは「昨日までビーチでバカンスしてました！」と言わんばかりの見た目の男だった。目に眩しいピンク色のボタニカル柄のアロハシャツに明るいベージュ色のジャケパンを合わせて、南国の海岸から帰ってきたばかりだから外し忘れているかのよう

に、真っ黒い大きなレンズのサングラスを冬の東京でもかけたままの姿で。「どうも、木場さん……？」面食らう土家の肩を木場はぼしんと叩き、やや力づくで事務所に招き入れた。「そのシャツいいねえ！ パイソン柄？」

「へビ年だから？ どれで買ったの？」

アロハおじさんに連れて行かれるスキンヘッド柄シャツ兄ちゃんの背中を眺めて、どっちもどっちのファッションセンスなあと同じ感想を抱いていたカシマたちに向かつて振り返って木場は言った。「皆も入って！ あと僕のことば太陽さんと呼びなさい」

応接間のソファはひしひし掛け椅子2脚に3人掛けの長椅子が1脚。窓にフラインドがかかった部屋に差し込む外光はすこし薄暗い。長椅子の隅には大きなもこの毛玉がどろろを巻いて占拠していた。

弟子丸が聞いたこともないような甲高いささやき声を上げた。ソファでべつりい

いた猫は失った耳をピンと立てて、大勢入ってきた来客に目を丸くしてのっそり起き上がった。太い胴体は渦巻き模様で、ふさふさの豊かな尻尾をもち、口元に紳士然としたヒゲ模様のある猫だった。「カイゼル髭？」と和田が尋ねた。猫は見た目に想像されるよりもか細い声で「ナー」と鳴いて、何か言いたげに足下をうろついた。

「これはうちの受付嬢」木場は足下に来た猫を抱きかかえた。冬毛の長毛猫であることを差し置いても見慣れた猫のサイズよりも巨大で、小柄な柴犬ぐらいの大きさはある。「オンナノコなんですねえ、そんな立派なおヒゲがあるのに」弟子丸の声のトーンが戻らない。

面談のあいだじゅう、弟子丸は猫にほだされて使い物にならなかった。ソファに座し、弟子丸の膝の上に飛び乗って、そのままくつろぎはじめた。「おナマエは何ていうんですかあ？？」

「あらすじ」大学生のカシマはサークルの肝試しでトラブルを起こし、寺院へお祓いに連れて行かれる。寺の住職・土家とカシマは意気投合し、カシマは土家が主催するバンド・環・Tamaに加入する。既存のバンドメンバーの弟子丸・和田にも認められ、カシマはバンドでベースを弾き、土家とのツインボーカルも担当しはじめ。ライブハウス・SHADEでライブステージを成功させたカシマたちだったが、彼らの音楽活動は思わぬ方へ向かうことに……。

●環・TamaKi-

4人組オルタナティブロックバンド。八王子で結成。

嘉嶋元氣（かしま・げんき）

大学生。ボーカル・ベーシスト。なにかと間が悪い。

土家泰寛（つちや・たいかん）

僧侶。作詞・ボーカル・ギタリスト。寺生まれで霊感が……？

弟子丸魁（でしまる・いさむ）

中古ギター屋店員。ギタリスト。ちよろい。

和田幹央（わだ・みきお）

花屋。ドラマー。マイペース。

●ライブハウス〈吉祥寺SHADE〉

環が出演したライブハウス。店長は元・パンクロックバンドのドラマーの在原（ありはら）。

「松田くんだよ」

「男の子？」と和田。

「女の子」

「なんで？」と土家とカシマ。回答は得られなかった。

SHADEの在原店長はスリーピース編成時代の環の音源を渡していた。木場の手元にはSHADEでの12月のイベントを撮影したビデオも送られていたのを環の面々は知らなかった。

「ベースがいいねえ！ 僕頑張ってるベースト大好き。ベースストは誰？」

と尋ねられてカシマが、はいと控えめに手を上げる。

サングラス面の木場がオーバリアクションに驚いてみせる。あらゆる仕草が「アメリカ帰り」っぽい。

「わあ、君？ ライフと雰囲気違うねえ」

「テープの演奏は弟子丸さんだからボクと雰囲気違うかも……」

「ネコちゃんナデナデしてる人が弟子丸さんです」と和田が補足。その弟子丸は膝の上を猫に占拠されながら無心で頭を撫でている。

そうして木場の言うCDリリースの条件や報酬を話されるままに聞いていたが、強烈な重力で己の世界観の方向に脱線しつつある木場のマシンガントークのせいで話が頭に入らない。

「最近ずっとセッションが良い感じで、色々なことがうまく回っていてね、僕を中心に」

「向こうじゃ参ったよ、僕年末年始はアメリカにいたんだけどねえ、知り合いが代々やってる小さなホテルのニューイヤーパーティにどうしても来てくれていうんだけど、奴らいつまでも引き留めて帰してくれ

なくて。来年までここで弾かせるつもりか、うちには猫がいるんだ！ って何とか逃げてこれたよ」

「今はちょうど輪っかもよく見える頃じゃない？ でもこの角度だとフラフラよりも空から見ると大きな目みたい」

「そういうばりリーダーって誰？」

そして沈黙が訪れて、いま質問されていたんだと環の一同は気付いて顔を見合わせる。 「リーダー？」と聞き返す。

「バンド名決めた人」と木場。半月型に笑うその大きな口。

土家以外の面々がいつせいに土家を見て、土家は「ええ？」と声を漏らす。

「いいねえ、服のセンスも言葉もグッド。それでいいよ。」

どうと。

「うちでリリースしない？」

そういうばりという話だった。

改めて話を聞くと、条件としては破格だった。慈善事業でもない限り、無名で実績もない新人バンドにいきなり持ちかけるような規模の話ではない。

土家は口ごもる。「ちょっと考えさせていたでもいい……」と先延ばしにしようとしても、「考えが決まったから来てくれたんじゃないの？」と制された。木場は身じろぎ、姿勢を正して土家を捉える。

「チャンスっていうのは人生に何度訪れるか分からない。誰も声をかけて貰えないまま、旅を終える奴だっている。そんな奴は大勢いる。でもここにチャンスがある。考えが決まってくなくても、悪いようにはしないチャンスだ。それをあげるっていう話。大人しく受け取ってもいいんじゃない？」

「それにしちゃあ話がデカすぎます。ボランティアのパトロンってわけじゃないでし

よう」

相手の気分を書きたくないような言葉の裏で土家は暗に問う。何が狙いなんだ？

木場は室内でも外さない真っ黒いサングラス越しに、木場に問う土家を見据える。その向こうにあるはずの面の眼は誰にもまったく伺えない。

「そりゃあ、最初にデカめの貸しを作ったと、信仰が芽生えるじゃん？」

黒いレンズに阻まれながら、釣り上げた口角しか見えない木場の両の眼のあるべき場所を見つめ返し、なんとか土家は二つ返事を避けた。環をここに紹介した在原の言い分を思い出して「在原店長が『とりあえず会ってみて』って言うから来たんですが……」と言いつつをひねり出すと、「あ、そういう温度感なの？」と木場はあっさり引き下がった。

「じゃあ、君たちの話がまとまったらまた教えてくれる？ 僕宛でも在原くん宛でもいいんだけど」

そう言っちらりと腕時計を確認。「長話すぎた」と席を立つ。「松田くん、病院の時間だよ！」

弟子丸の膝の上に漬物石のようにまどろんでいた猫の松田くんは、のっそりと起き上がり、逃走を図る前に木場に捕縛された。「どこが悪いんですか？」とカシマ。

「いや、ただの健康診断」松田くんを抱いて答えた木場はそそくさと通院の支度をしようとしたが、ふと木場を見上げたカシマの顔を真顔になってじっと見つめた。サングラスに隠れて表情の半分は見えないにもかかわらず、何かに気付いたことが表情に表れていた。けれど木場の興味が何なのかは分からないほどに、サングラスは真っ黒で木場の視線は伺えない。

ほんのわずかな時間だが、穴が空くほど見つめられて、カシマはとっさに口走った。「ボクの顔に何かついてます？」

「うん」

この会場で一番控えめで、静かで確かな相づちだった。

一転、「じゃあ悪いけど僕行かなきゃだから決心したら教えてね！ あと皆『口コロしてから帰るなさい、毛が毛まみれだよ！』と軽躁な口調に戻った木場は、身じろぐ松田くんを「よここいしょ」と抱き抱えて部屋を去っていた。

「ふわふわ……」黒い服を上下とも毛だらけにした弟子丸は放心している。

扉の向こう、木場とその飼いの猫が遠ざかった気配を感じ、「やべー」と和田がコメントした。「見た？ 社長さんのあの服。トケイソウ柄って、どこで売ってたんだ？」

「やべー所はそこじゃねえだろ」声を潜めて土家がぼやいた。「大丈夫なの？ あれ？ ぜってーやべーよ。カタギじゃねーっていうか、あんなの絶対マトモじゃねーよ」

「でもニャンコがいんだぞ」猫に完全に絆された弟子丸が反論する。「ネコ飼ってる奴に悪い奴いねーよ。しかも健康診断に連れてってる。悪者はペットを動物病院に連れてかない」

「膝にネコ乗せた悪い奴なんていっぱいいるだろ……アニメとかに……」と土家はもどかしそうだ。「とにかく、あれにはなんか裏がある」

控えめなノックの音が扉を叩き、一同は黙る。

「すいません、口コロ口コロ持ってきましたあーと入ってきたのは、20代前半、カシマと同年代に見える、トレーナーにジューパン履きのカジュアルな格好をした細身の天パ

● Finedge Records

ファイネッジレコードス

渋谷に事務所をかまえるインディースレーベル。

木場太陽（きは・たいよう）

社長。室内でもサングラスをかけ、やかましくうさんくさい。

毛利（もうり）

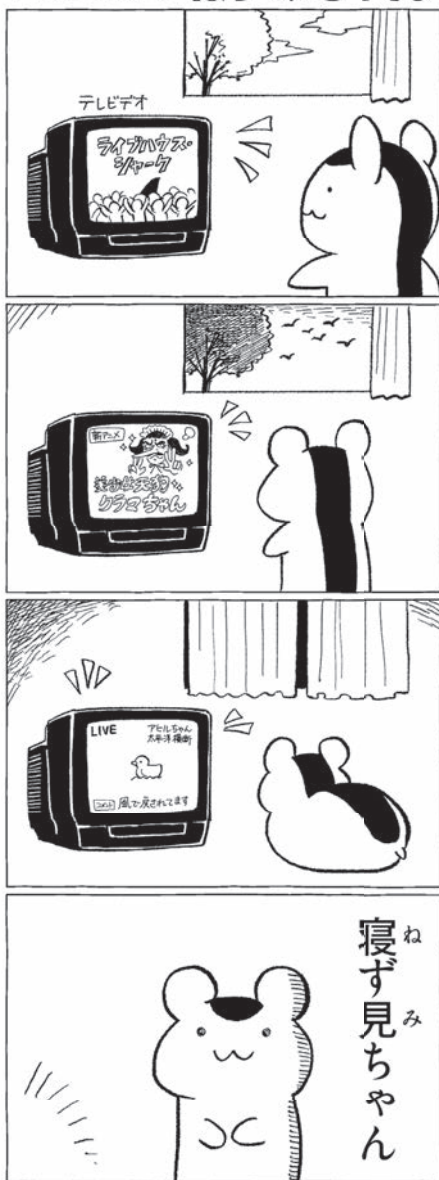
雑用係兼カメラマン。慇懃無礼。

松田くん（まつたくん）

事務所の飼いの猫。太い渦巻き模様の長毛と口元のカイゼル髭模様が特徴のメス。推定メインクーンだが、メークイン（辛）とよく間違われる。人なつこく大らかで、撫でてもらえるなら誰でもいい。動物病院の待合では「木場 松田くんちゃん」と呼ばれる。▶



松田くん

日曜漫画劇場 **ねずみちゃん**

の男子だった。

「すいませ〜ん本当に、うちの社長が本当にすいませ〜ん。箒とか粘着テープとか好きに使ってください、本当すいませ〜ん」

下手に出て社長の無礼を代わりに詫言た彼は事務員の毛利と名乗り、掃除用具のほかに何枚かのCDのジュエルケースを持ってきた。ファイネツジレコースで契約通りにプレスした若手バンドのCDの実例だ。

「このうのを見せながらきちんと説明すればいいのに……」一応、うち、本当に音楽レーベルやって、こういう感じで出します。CDは出ます。流通経路は持っているし、レーベルのファンもいるみたいです。こんな感じに」とページに付箋を貼った音楽雑誌を見せる。

「その音源は焼いてお渡しします。社長の態度はあんなんだからとちゃんとしたのが発売されます。デザインの手配も込み、必要ならアー写もついで撮りますよ」

「どうも。こちら何も分かんず『来て』と言われて来たもので……」と土家が頭を下げた。「正直、おたくの得意なジャンルなんかもよく分からないまま呼ばれて」毛利は心底申し訳なさそうに「自分も、

ジャンルはよく分かんないです。強いて言うなら『前衛』っていつか『変なやつ?』付箋をつけた雑誌のページをめくると、新譜紹介コーナーの「コラムで取り上げられている〈Drive to Pluto〉というバンドにマーカー線が引かれていた。机の上に広げられたCDのなかにも同じ名前のものがある。

カシマは雑誌に目を通した。

「知ってます?」と毛利が尋ねる。

カシマは首を振る。プログレ、ポストロック、文学性、云々という言葉が並ぶ抽象的なレビュー文から、音像はまったくイメージできない。

「それはうちで一番憂なバンドですよ」

確信または呆れを込めて毛利は言った。

作戦会議 in ファミレス。

うまい話をいぶかしむ土家に対して、弟子丸と和田は、大きなリスクがないならやってみてもいいんじゃないかと説きながらもレコーディングのスケジュールを現実的に心配する構図になり、カシマはやや土家の側に寄りながらもどちらに味方すべきか分からなかった。

あれだけ気楽にカシマをバンドに誘ってきた土家が、バンドの音楽活動の広がりについては腰が重いのがカシマには不思議だった。弟子丸と和田の意見に対して、土家は「カシマくんにも学業があるからなあ」とのろりとした口調でいる。

「ボクがいちばんヒマだよ。だってもうすぐ受験期間で春休みになるし」

「オレもやるなら早めがいいな。卒業シーズンから母の日まではずっと繁忙期。花束つくりっぱなし」と和田。

「事務所にニャンコがいるんだぜ?」と弟子丸。「ニャンコだよ、ふわふわだったよ?それにツッチーさ、あの社長とだいぶ似た

（んじゅうにんき）



A4見開きの紙面に6000字の小説を掲載した結果、ぎゅうぎゅう詰め組版になったことをお詫びします。◆今号のフリーペーパー『海辺新聞』は2つ折り・4ページの仕様になった。通常版のA4ペラよりも新聞らしい見た目になったが、いかがだろうか。◆私はブログで毎月の活動報告

よな格好じゃん。パイプス合っちゃんねーの」

「あの人ゼってーヤバいって。あれはカタギじゃねーよ」と土家は声のトーンを落として繰り返す。

「あんなファッションのロックおじさんなんてギター屋には毎日来るぜ」弟子丸は悠然とコーヒーをすする。

「そうかねえ……」と土家は口ごもり、腕組み考え、コーヒーをもう一杯飲み、そして折れた。「俺の気にしすぎかもしれない」斯くして契約は交わされた。

記念受験みたいなものだった。

バックナンバー配信

『海辺新聞』のこれまでの記事を、シーサイドブックスのウェブサイトでご公開しています。

libsy.net/blog/2811



Yodaka YAMAKAWA

Follow me on...

Website 小説掲載・ブログ

libsy.net

Fediverse イラスト・設定・ネタ投稿・日常

@mtn_river@misskey.design

Bluesky 告知用

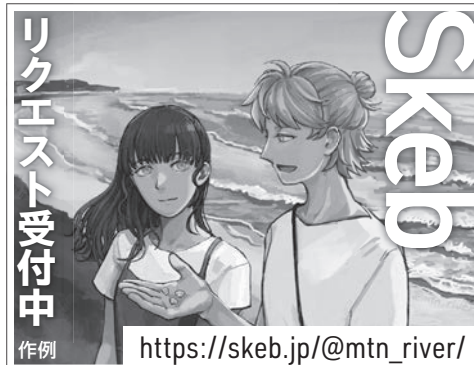
@mtnriver.bsky.social

Twitter 告知用

@mtn_river

2011年からTwitterを利用していましたが、現Xは正直もう見たくありません。

山川夜高の最新情報はサイト libsy.net を購読してください!



作例

https://skeb.jp/@mtn_river/